

Oshima
Letter

大島レター

7

November
2019





表紙のお話

入所者さんにヤマモモの木について話を伺うと、「木」にまつわるエピソードや記憶を辿ることができます。大島のヤマモモの木は、北の山の梅林の近くに2本あります。今から約60年前、高知県の県花、徳島県の県木がヤマモモであることから、両県から寄贈されました。また、2003年から納骨堂が新しくなり、風除けのために納骨堂の周りに数本植えました。6月の梅雨の時期に入ると、青々とした葉っぱのつけ根に鈴なりに真っ赤な実をつけます。入所者さんの間では、昔はヤマモモを加工する習慣はほとんどなかったようですが、瀬戸内国際芸術祭が始まるとカフェ・シヨルで加工され、ドリンクとして提供されます。ふっくらとふくらんだ甘酸っぱい実は、砂糖に漬けると赤く染まったシロップになり、見た目も美しい仕上がりです。

(写真…白神基広)





目次

〈ごあいさつ〉

「瀬戸内国際芸術祭2019」を終えるにあたって

佐藤今日子(瀬戸内国際芸術祭実行委員会事務局長)

3

〈寄稿文〉

大島青松園のジオラマ制作記

金代健次郎(ベネッセアートサイト直島マネジメントセンター長)

5

大島の記憶、明日につなぐ——瀬戸芸をきっかけに——

高木智子(朝日新聞)

7

〈連載コーナー〉

瀬戸内放送局 今月の「大島アワー」

10

編集後記

「瀬戸内国際芸術祭2019」を終えるにあたって

瀬戸内国際芸術祭実行委員会事務局長 佐藤今日子

4回目となる瀬戸内国際芸術祭2019は、会期中多くの来場者をお迎えし、11月4日に閉幕します。今回の芸術祭にとって、大島は大変重要な場所になったと感じています。

今回は、これまで以上に海外からの来場者やボランティアサポーターが目立ち、各会場では多様なイベントや食が楽しめるなど大いに盛り上がりましたが、これまでの3回の芸術祭と比べ最も大きな変化があった島が大島です。

まず高松港と大島を結ぶ官用船が、芸術祭2019の開幕日から、誰でもいつでも乗船できる一般旅客定期航路となり、前回の芸術祭の2倍以上の方が大島に上陸しました。数年前に



は考えられなかったことですが、大島青松園および園を所管する厚生労働省の大きなご努力により実現したものです。必然、こえび隊の皆さんは、案内に、受付に、カフェ営業にと大忙しでしたが、皆さん充実の笑顔で迎えてくれました。特に島内ガイドツアーでは、たくさんの来場者を迎えながらも、ハンセン病療養所としての大島の歴史を丁寧に伝えてくれました。

またアート作品については、これまでのやさしい美術プロジェクト、田島征三さん、山川冬樹さんの新作に加え、鴻池朋子さん、クリステイアン・バステイアンスさんが新たに参加し、入所者の皆さんがこれまで暮らしてこられた記憶や記録をきちんと伝え将来につなげるという一番大切な考え方を継承しつつ、見応えのある作品をつくりました。展示場所も、これまで展示してきた元の入所者寮から飛び出し、北の山の約1.5キロメートルもの散策路を復活させた作品は、歩きながらの本当に美しい島と海、光と風が五感に突き刺さる体験ができます。またドキュメンタリー映像とフィクションが交错

する舞台にまで広がっていきました。

さらに、かねてから入所者の皆さんが心待ちにされていた社会交流会館も、芸術祭2019の開幕日である4月26日に合わせ、国内外から訪れる方々がハンセン病の正しい理解と歴史を学ぶ場として、また入所者の皆さんとの交流の拠点となることを目指してグラントオープンしました。作品である「(つながりの家)カフェ・シヨル」をはじめ、歴史資料やジオラマがある展示室、入所者の方が読んでいらした本が閲覧できる図書室、面会の方のための宿泊棟、多目的ホールなどが整備されています。注目なのが、1958年前後の約700名の入所者がいた時代の150分の1サイズのジオラマと貴重な当時の写真の展示です。入所者自治会のご依頼で皆さんの記憶や思い出を基に多くの人々の手によって制作された大島のジオラマは、建物を再現するだけでなく生活のシーンや思い出も合わせて再現されており、訪れた人は当時の大島をリアリティーを持って感じることで、島の皆さんがとてつもなく長い年月を支え



あつて生き抜いてこられたことを知ることができます。

このように、今回の芸術祭では、これまで大島に携わられた多くの組織や個人のご努力がだんだんと形になり、来場者がハンセン病や島の歴史を理解し易くなってきたことを実感しました。芸術祭以外にも、高松市主催で子どもたちが大島に宿泊しアーティストや入所者と交流する「子どもサマーキャンプ」やワークシヨップなどが毎年開催されており、このようなことの地道な積み重ねが、大島であったことを後世に伝えていく力になるのだと思います。

最後になりましたが、国立療養所大島青松園、大島青松園入所者自治会の皆様をはじめ、芸術祭会期中はもちろん、それ以外の時間もずっと大島のさまざまな活動に参加し続け来島者と入所者との橋渡し役を柔らかに担ってこられたNPO法人瀬戸内こえびネットワークの皆様、ご協力いただきましたすべての方に深く感謝申し上げます。

大島青松園のジオラマ制作記

ベネッセアートサイト直島 マネジメントセンター長 金代健次郎

「事実」を知らないことの怖さ——

① ジオラマ制作の経緯

「昭和30年代前半の大島青松園のジオラマ制作をしてみないか」と瀬戸内国際芸術祭の総合ディレクター北川フラム氏からのお誘いがあったのは、2017年夏ごろではなかったかと思えます。私は趣味の鉄道模型で、いくつかのジオラマを制作していて、そのことをお聞きになり、声がかかりました。というのも、大島青松園入所者自治会会長の森さんが、他の園のように大島全体を説明できるジオラマが必要とお考えで制作者を探していたからです。さらに青松園としては、2019年4月に社会交流会館を公開して、ハンセン病の啓発活動の拠点の整備の必

要があったと聞いています。このような条件が重なり、ジオラマ制作が始まったのは、2018年初頭だと思えます。

② ジオラマの大きさ、意図、そして資料探し

大きさは社会交流会館の展示室に入るサイズでしたが、私は模型の部品が多い、150分の1の大きさにこだわりました。なぜなら入所者自治会副会長の野村さんから、島全体の姿ではなく、自分たち、つまり入所者の生活圏に限定して制作してほしいという要望があったからです。

しかし、ここからの資料探しが困難を極めました。島全体の航空写真や、地図はあるのですが、建物の図面は極



めて少なく、かつてあったと思われる建物はほとんど壊されていて、なかなか手掛かりがありません。

そうした中で建築士の林幸稔さんが、限られた資料から図面を起こし、資料のないものは、入所者さんからの話と、当時の写真からひとつずつ図面を起こし、確認していきました。こうした作業の中で、当時の生活の様子をお聞きしたことは、制作する上で、大きな励みになりました。

③ 延べ750人で松を作り、140棟の家をつくり、周りの海を作る

「青松園」の名前のとおり、昭和30年代前半は現在より極めて多くの松林があることが、当時の写真からも、入所者の方々のお話からも伺うことができ

ます。島全体で約1700本の松を、高松市の高校生、こえび隊、香川県、岡山県の市民の方々などと、ワークショップ形式で作り上げました。

また島で700人の入所者が生活をしてきた時期は、独身不自由舎、独身軽症舎、夫婦舎、治療棟、病棟など140を超える建物がありました。これらは、ひとつひとつ、当時の写真や、森さん、野村さんの確かな記憶から制作をしています。

4 入所者の生活感を出すための工夫

多くの療養所のジオラマは、建物が主体であり、そこで生活をされていた入所者の姿があまりありません。そこで大島では、残された写真や記憶をもとに、印象的な生活場面を再現するため、お人形を制作し、設置することにしました。また、入所者が住んでいた寮にLEDライトを埋め込み、夜の島の風景を見られるような工夫をしました。こうすることで、ここでの生活が

リアルに表現できると考えたからです。人形は、こえび隊の白石幸一さんが、お仕事のかたわら、極めて精緻な人形を制作してくれました。それらを配置することにより、野球大会、地引網、子どもたちの生活、島を去る方の見送りなど印象的な場面を表現しています。

5 「本当のこと」を知るための努力を！

このプロジェクトを通じて、一番感じたのは、「私はハンセン病のことは実は何も知らなかった」ということでした。いくつかの書籍を読んではいましたが、森さんや野村さんの実体験のお話にかなうものはありませんでした。またハンセン病療養所の最悪の施設といわれている、群馬にある国立療養所栗生楽泉園の「重監房」を見学しました。が、まさに、言葉を失う場所でした。そのあまりの苛酷さとそれを容認していた当時の国と国民は、いったい何をしていたのでしようか？ 深く、

悔恨の念に駆られています。

2010年に瀬戸内国際芸術祭が始まるときに、福武総合プロデューサーと北川総合ディレクターから、大島と豊島を加えない瀬戸芸はありえないという話をお聞きしましたが、今年の瀬戸芸では、すでに7000人を超える人々が大島を訪れています。大島のアート作品は、入所者が生きた証やここで暮らした記録・記憶を伝えるための展示が多くあり、鑑賞者は瀬戸芸をきっかけに大島を訪れ、歴史を知ることができます。また、こえび隊は瀬戸芸の期間だけでなく、通年で大島へ通い、大島の歴史を伝えるためのガイドツアーやカフェの運営などを行っています。

こうした活動が、近代日本の負の遺産を学ぶ機会として提供され、再びこのような施設ができないことを祈るとともに、現在進行中の、ハンセン病家族訴訟などについても理解を深める一助になればと願うばかりです。

大島の記憶、明日につなぐ——瀬戸芸をきっかけに——

朝日新聞 高木智子

ハンセン病をめぐる取材を続けながら、なかなか接点のなかった大島に出かける機会に恵まれたのは、2010年秋でした。

当時、ご健在だった詩人の塔和子さんが過ごしている部屋を訪ねた後のこと。高松に戻る船を待つ間、松林近くのベンチに腰掛けていました。どこからか笑い声がします。リュックサックを背負った学生、デート中らしき人もいます。その横を、入所している男性が、チャリンチャリンとベルを鳴らしながら自転車で駆け抜けていきます。青い旗はためいていたのが印象的でした。ここはハンセン病だった人しか暮



らしていない島。閑散としているはず。それなのに、どうして楽しみに闊歩している人たちがいるのだろう、なにが起きているのかと不思議でした。

2010年にスタートした瀬戸内国際芸術祭。いまでは現代アートの祭典として親しまれていますが、当時の私は、あの青い旗が、瀬戸芸のシンボルとも知りませんでした。

「GALLERY15」と掲げられたプレートを発見し、ある長屋に入ると、後遺障害によって手が動かなくなった人が使った補助具や義足等が展示されています。愛用のカメラやタンスなどの生活用品も、アートの枠組みで再構築されていて驚きました。

ハンセン病について語る時、「面白い」なんて言うてはいけなあと思っていました、そこに風穴をあ

けるものだと理解しました。

例えば、古いカメラを見て、一般社会と隔絶された人はどうやってカメラを購入し、何を写し、手が不自由な場合はどう撮影したのか、いろいろと想像するきっかけになりました。

「カフェ・シヨル」も新鮮でした。今は2代目になりますが、オープン時は芸大出身の20代の女性ふたりが切り盛りしていて、大島の療養所の人たちがつくった果樹や野菜を、カフェご飯にアレンジしていました。名物になった「ろっぽう焼」は、療養所の人たちからどんな思いで生きてきたのか丁寧に話を聞き取り、そうして慣れ親しんだ和菓子存在を知り、再現されたもの。懐かしい記憶まで掘り起こしていました。

シヨルは、隔離政策によって、島から出られなかった「中」の人と、



「外」の人とをさりげなく結んでいきます。お茶や食事を楽しみつつ、時には心通った交流もうまれます。

かつて客人にお茶をすすめても、一切飲んでもらえなかった——大島の人々にはこんなトラウマがあっただけに、シヨルの取り組みは画期的。ニュースでした。

ボランティアのこえび隊は、アートを目的に島を訪れた人たちを率いて納骨堂や解剖台などをまわり、人権が侵害されてきた歴史を伝えています。瀬戸芸を機に、たくさんの人が島を訪れる様子にふれて、「病気になったわしらを棄ててきた島に、価値のあるものなんて残されていないよ」と当初は心配した人々の顔がほころび始めました。

なぜ、大島と瀬戸芸は調和できたのか考えてみました。瀬戸芸の原点は、地域を知ること。アーティストやスタッフはその土地に暮らす住民の思いに耳を傾け、対話を重ねることを重視していました。

アーティストらからの問いかけに、大島の人々も応じました。病にかかり、隔離され、名前を失い、ふるさとに帰れなくなり、家族とのつながりも絶たれ、子をもつことも許

されず、一生を終えていく……。らい
予防法と優生保護法による絶対隔離、
絶滅政策の現場だったその島で、生き
抜いた人々の喜怒哀楽を反映した作品
が表現されていたのです。

3年に1度の芸術祭は4回目を迎
え、大島の景色は随分変わったと感
じます。作品は多彩になり、ファンが増
えました。

「生きる意味を考えさせられました」
「選択肢のない人生とはどういうも
の?」「生き抜いた人を尊敬します」「絶
望したから、人に優しくなれるの?」。
大島に来た人たちの感想です。

「私にできることは何?」と考えた写
真家の女性は、神戸市内で大島の写真
を披露しながら、その魅力を語る食事
会を開きました。アート作品を追いか
けて島を訪れた東京の女性は、入所者
による古い油絵の修復を手伝っていま
す。大島のジオラマづくりには延べ



800人が参加しました。

「ようやく話そうという気持ちに
なったよ。これから先、島にだれも
いなくなったとしても忘れてほしく
ない」。島に60年以上暮らす男性は、
悲しい記憶、夫婦支え合った愛おし
い記憶、さまざまに語ってくれます。

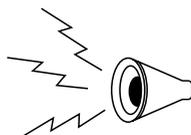
大島はどんな記憶を刻むのか。知
らずに訪れた人たちも、島を歩き、
なにかしら感じとって帰っていくよ
うです。誤解や偏見、思い込みを解
消する一歩となるのではないでしょ
うか。

そうした意味で、瀬戸芸は現代
アートの祭典という枠には収まりき
れません。排除されてきた島と社会
とを結ぶ橋になっているのですから。

ひとつひとつの出会いや動きは目
立たないかもしれませんが、きつと
「大島の記憶」を明日につないでい
く力になると信じています。

〈連載コーナー〉

瀬戸内放送局 今月の「大島アワー」



毎月1回園内で放送中の手

づくりラジオ番組。最近は、

大島や他の島の出来事、芸術祭の話題を中心に放送して

います。入所者のみなさんの

普通の生活が垣間見える「趣

味の時間」や「クラブ活動」の

コーナーは楽しい話題が盛

りたくさん！今回はその

「趣味の時間」のコーナーか

ら、ペーパークラフト（折り

紙手芸）が趣味の本田美智子

さんにお話を聞きました。

出会いは12～13年くらい前ですね。ある雑誌を見ていたとき、ペーパークラフトでできたフクロウが載っていたんです。それを見たときに「私も作りたい!」と思い、すぐに材料を購入して作ったのが最初のきっかけです。長方形の紙を折って小さな三角形の折り紙にするところまでは作ることができました。しかし、それらを積み木のように組み上げて形成していくのですが、何も分からないところからだったので、大変苦労しました。1つ完成した作品を見ると、作りたいという意欲が湧き、それからもう少しやってみようかと思うようになりました。

今は、来年の干支のねずみを作っている最中です。これまで作った作品の中で一番難しかったのは、リスを作ったときでした。リスのしっぽのカーブの付け方が難しかったのですが、こだわったところでもあります。

毎年、大島青松園の入所者が制作した作品展示を香川県庁や高松市役所のロビーで行っていますが、私も出品しています。いろんな方達に見てもらえると嬉しいです。また、出来上がったときの達成感はとても気持ちが良いです。趣味の一つとしてこれからもいろんなペーパークラフトに挑戦してみたいと思っています。

こだわったリスのしっぽのカーブがこちら!



50点程の作品を展示

編集後記

瀬戸内国際芸術祭の会期中に来島されたお客さんとゆっくりお話しする機会がとれなかったので、誰でも自由に書けるノートをカフェ・シヨルに置きました。そこには、芸術祭をきっかけに訪問することができた、アートから入所者の想いを知ることができた、近くの療養所にも行ってみようと思ったなど、ここでは書ききれない程の感想がありました。瀬戸芸が始まった2010年の頃、まさかこんなにお客さんが来るとは誰も想像をしていなかったと思います。これまで以上に多様なお客さんが大島を訪れている様子を見た入所者さんは「時代は変わった！」と言っていたのが印象的でした。またこれからも新しい景色をみなさんに届けられるようにしたいと思います。